

画家にとってのデッサン ―小出檐重の場合

川原百合恵

芸術の秋。当館は現在休館中ですが、巷では多くの展覧会が開かれています。私も休みの日には訪れ、作品に感動したり展示の方法を勉強したりしています。

ところで、美術作品を見て感動するとき、私たちは何に心を動かされるのでしょうか？直観的に「好きだ」と思ったり、色彩に元気をもらったり、ある物語やメッセージを読み解いたり、作品を前にしたときの心と頭の反応は様々です。絵画作品の場合、感動するポイントの一つに、描かれているものが本物そっくりであること、現実世界がそのまま画面に閉じ込められたような、生き生きとした空間があらわれていることがあると思います。

画家の力量を示すひとつの指標が、「デッサン」の力です。デッサン（素描）とはものの形や陰影を紙に写しとることで、画家の基礎的な訓練でもあります。

今回のコラムでは、芦屋ゆかりの洋画家・小出檐重（1887-1931）の当館所蔵作品をもとに、画家にとってのデッサンについて紹介します。檐重と同世代の画家・黒田重太郎は「本来彼はパントル（画家）であるよりも、質上よりデシナツール（素描家）であり、その油絵の多くは、そのまま油絵の具を以てするデッサンだと云ふことが出来る」（註1）と述べており、そのデッサンの力は画家仲間たちが広く認めることでありました。

檐重は「裸婦の檐重」と言われるほど、独自の裸婦像の名作によって歴史に名を残しました。その中から《横たわる裸女 A》（図1）を見てみましょう。女性の体つき、肌の質感がみずみずしく表現されています。落ちる影によって、画面の左上の方向から光が差し込んでいることがわかります。本作のように、モチーフ（描かれるもの。本作の場合は裸婦）の特徴やそれが置かれた場の状況を的確に表すデッサンの技術を、檐重はどのように習得したのでしょうか。

大阪の老舗薬問屋に生まれた檐重は、文化に造詣の深い両親のもとで育ち、幼少期から絵の才能を表します。10代の頃の鉛筆デッサンからは、モチーフの特徴を的確にとらえる卓抜した力が見てとれます。

1907年、彼は洋画家を志し、東京美術学校（現・東京藝術大学）の西洋画科を受験します。試験科目は「木炭デッサン」。木炭とは木の小枝を炭化した画材で、木炭紙という専用の紙に描きます。木炭は鉛筆の芯よりも柔らかく、紙に擦ると粉末となって紙の目の凹凸に入り込み、濃淡を表現します。洋画（＝油彩画）のデッサンは木炭で行うことが一般的ですが、受験の直前まで木炭デッサンをしたことがなかった檐重は西洋画科の合格ラインに到達せず、やむなく日本画科へ入学します。しかし洋画をあきらめきれず、1909年2月から白馬会洋画研究所にて木炭画を学びなおし、同年9月に念願の西洋画科1年に転科を果たします。この約半年の間に檐重は幼少期からの画力に加え、木炭デッサンの力、すなわち洋画家としてのデッサン力を身につけたのです（図2、3）。

檐重は洋画を「陰影と立体が存在し、太陽の直接の影響による光が存在し、空気があり科学があり実際と強き立体感が頑として控えている」（註2）ものととらえていました。「形態、平面、立体、凸凹、明暗の調子等の有様を研究し表現するところの仕事」（註3）であるデッサンは、彼にとっては洋画を描くための訓練であるだけでなく、洋画の表現そのものであったのです。

彼のデッサンの技術は、檐重が黒田ほか二科会の同期たちと設立した信濃橋洋画研究所（後の中之島洋画研究所）や、彼に直接指導を請うべく若き画家たちが集った芦屋のアトリエにて、多くの後進たちに受け継がれていきました。

（かわはらゆりえ 芦屋市立美術博物館学芸員）



1



2



3

- 図1：《横たわる裸女 A》
1928年 油彩、布 当館蔵
図2：《素描（人体デッサン）》
1911年頃 木炭、紙 当館蔵
図3：東京美術学校にて裸婦デッサンの授業風景。1910年頃。
着席の左から3番目が小出檐重。

註

- (1) 黒田重太郎『N.KOIDE小出檐重画集』
美術出版、1955年
(2) 小出檐重「油絵新技法雑誌」『アトリエ』
アトリエ社、1928年4月号
(3) 前掲、1928年5月号